

# 日・英・仏語新聞を通して見た 孤島時代末期の上海租界劇場文化のゆくえ

——ライシャムシアターに関わる言説を中心にして——

大橋毅彦

はじめに

租界都市と呼ばれていた時代の上海で生じていた文化的混沌の実像をあまねく照らしたすためには、その混沌が集中的、象徴的に現れた対象を的確に選び取るとともに、一国主義的なそれを越えた複眼的な視座を用意することが重要である。

以前「民族の夢の坩堝としての劇場空間——蘭心大戲院 '40 S」<sup>(1)</sup>と題する拙論をまとめた際にも、筆者はそうした問いをみずからに向けて発しながら、フランス租界の一郭にあった蘭心大戲院（ライシャムシアター）を舞台として数々の中国の話劇やロシアン・バレエが上演されていたこと、それらの芸術作品の脚色にあたっては異民族間での文化交流もあったし、他方、上海における政治的軍事的プレゼンスを強めていた宗主国日本サイドにおいても、それらの文化動向に対する評価がけっして一枚岩的なものではなかったことなどを指摘してきた。

しかし、そうした検討を行うにあたり、その時点で活用できた資料は主として邦字新聞「大陸新報」とどまり、同時期の上海で刊行されていた他国の新聞メディアが、この劇場の何をどのように取り上げているのかといった点については言及することができなかった。

この小論では、そのようにして残された課題に少しでも答えるために、「ザ

・シャanghai・イヴニング・ポスト・アンド・マーキュリー (The Shanghai Evening Post & Mercury)], 「ル・ジュールナル・ド・シャanghai (Le Journal de Shanghai)」という新聞を新たな資料として組み込み、「大陸新報」も含めた3紙の記事の蘭心大戲院をめぐる扱いにどのような相違があるのかを考察してみたい。比較の対象とする時期は、今回は主として1941年の5月という1ヶ月間に絞ろう。アジア太平洋戦争開戦の約半年前、孤島上海が消滅する直前の時期である。蘭心大戲院をめぐる3紙の言説の違いを問題にすることは、そうした時期の上海文化界のゆくえが、そこに集った国家や民族の持つさまざまな色合いのイデオロギーで染め上げられていたことを説き明かしてもい

## 1 「大陸新報」が告げる上海バレエ・リュスの虹口公演

今回注目する時期よりかなり早い段階から、蘭心大戲院は上海在留日本人にとってそれなりの関心を惹く場であったようだ。1867年に共同租界の円明園路に建設されたこの劇場は、ほどなく火災に遭って焼尽、円明園路と道一本隔てた博物院路に移るが、たとえば、そこで1903年に滬上青年会が「金色夜叉」を上演したことを沖田一は伝えている<sup>(2)</sup>。また、第3代目にあたる建物がフランス租界の萬爾西愛路に落成したのは1931年をはじめであったが、同年3月15日の「上海日日新聞」広告は、そこでの催しがドライスデール・ドラマチック倶楽部 (The Drysdale Dramatic Club) 第1回公演「禿頭になる七つの秘密」(ジョージ・エム・マハン書き下ろし、SEVEN KEYS TO BALD-PATE)であることを告げるとともに、「日本人方に御馴染み深きライシヤム劇場が再築されました」という文句も掲げている。

このようなライシヤムシアター (\*これ以降、劇場名の表記は引用は別として、原則的には「ライシヤムシアター」もしくは「ライシヤム」を用いる) 関連の記事として「大陸新報」紙上に載ったもののうち、1941年5月はじめに掲載されたものが「春の掉尾公演 バレールス「コルセイル」」だった<sup>(3)</sup>。バイロンの叙

事詩を元にした3幕よりなるドラマ・バレエ「コルセイル（海賊）」が、5月1日、3日、4日午後5時（4日は午後2時15分からマチネーもあり）に同劇場で上演されることを写真入りで伝える記事である。

記事見出し中にある「バレールス」（上海バレエ・リュス）は、上海に流れ込む白系ロシア人の数が増えつづけていた1930年代半ばにロシアンバレエの伝統を受け継ぐかたちで結成され、1936年の「コッペリア」の上演以降41年春に至るまで約100回の公演、18種の作品の発表をライシャムシアターで行ってきた舞踊団である<sup>(4)</sup>。プリマバレリーナのオードリー・キング、プレミアダンサーのシュヴェルギー、振付者ソルスキーらが参加した約40名の団員からなる上海バレエ・リュスの活動に関しては、すでに「コルセイル」の紹介以前にも水上十郎「上海のロシアン・バレ」が「大陸新報」には載っていた<sup>(5)</sup>し、やがて同舞踊団唯一人の日本人ダンサー小牧正英が活躍するに至っては、草刈義人「舞踊の春」や今野秀人「美の饗宴—“白鳥の湖”を観て—」といった評が紙面を賑わすことになるだろう<sup>(6)</sup>。

だが、いまここで紹介した「コルセイル」公演を告げる記事に次いで注目したいものは、この舞踊団がライシャムシアターで引き続き活動を展開していく様相を伝える記事ではない。同じ月のうちに、このバレエ公演が今度はライシャムではなく、フランス租界や共同租界の心臓部にあたる外灘から見れば、蘇州河を境にしてその北に広がる虹口地区——上海における日本人コミュニティが濃密に形成されていた地域——で行われたことと、それをめぐる記事が「大陸新報」に頻出している点に目を向けてみようと思うのだ。

すなわち、5月6日付「大陸新報」の夕刊と朝刊（当時の夕刊はそこに記載された日付の前日に発行されている。つまり「5月6日」付夕刊の実際の発行日は5月5日である。）には、「虹口へ進出するロシアン・バレエ」という見出しの下にリッツ劇場がその上演の場になったことを報じた記事と、その出演者と演目が「ライセアム劇場定期上演団 LE BALLET RUSSE」による「海賊」であり、5月10日の昼夜2回にわたって公開されることを告げる広告とが、それぞれ載った。続く9日の「上海に於けるロシアン・バレエ 現地文化を語る座談

会(二)」でもこのことは話題となっている。ところが、10日付夕刊に載ったリュス団員の踊る姿を配した広告【図1】を経て、同日朝刊の広告欄を見るとそこには突如としてこのロシアンバレエの虹口第1回公演の中止を告げる「謹告」がリッツ劇場名で掲げられていることに気づかされる。そこでは示されていない「中止のやむなきに至」った理由については後で触れるつもりだが、18日になると再び「謹告」が現れる。今度の内容はそれが再度21日上演決定の運びに至ったというもの。それを受けて21日付夕刊では「海賊」の配役と物語の梗概の紹介が行われ、24日のコラム欄「南船北馬」には、21日の公演を実際に観た「■二」(「大陸新報」の閲覧には国立国会図書館所蔵のマイクロフィルム版を利用したが、史料の状態が不良のため、文字の判読不能の箇所が散見される。その箇所を■で示した。)なる書き手の「ロシア・バレエ」が載った。

さて、上海バレエ・リュスの本来の活動拠点を離れた虹口公演をめぐるこうした一連の記事の背後に透けて見えてくるものはなにか。それを明らかにするためにやや遠回りになるけれども、これより1年ほど前の1940年2月にこれまたリッツ劇場で行われた、在滬白系露人委員会文化部付オペラ団の「お蝶夫人」上演という催しに目をとどめることにしよう。

この歌劇の上演に関する「大陸新報」での記事は、1940年2月13日夕刊、18日夕刊・朝刊、19日の紙面で見つかるが、それらの記事の中に気になる事柄が出てくる。この催しの後援者が露字紙ルウン社に加えて上海毎日及び大陸新報社という日本の新聞社であること、そしてまた上演による純益金がすべて同委員会から日本軍に献金する運びとなっていることだ。これはいったい何を意味するか？

1940年初めといえば、第二次上海事変が一応の終熄を見てから2年余りが経過した頃である。戦いの余燼が表面的には沈静化してきた状況の中で、日本の上海統治の力点は軍事的プレゼンスを誇示することから、文化的な面からしてもこの街の主役の座に上りつめることへと移行しつつあった。それはたとえば、この時期の日本側の言説空間に、日本の進出による上海の「明朗化」を告げる言葉が溢れかえったことを見ても頷かれるし、より具体的な出来事を通し

てそのことを確かめるとするなら、それまでは日本人の進出が難しかった南京路の一等地に上海画廊が開設されたり、フランス租界の中心部にあったフレンチ・クラブを会場にして日本洋画展が開催されたのもこの年の春のことだったのである<sup>(7)</sup>。フランス租界にあるロシア人倶楽部での上演が好評を博した上海白系露人オペラ団の「お蝶夫人」が今度は虹口で公演されるということは、そんな「河向う」に対する文化攻勢を仕掛けた日本が、それと対応するかたちでこの地域を基盤とする異文化をみずからの勢力圏の中に取り込んでいこうとする、そしてその手始めとして上海に来てからの日も浅く、国家という後ろ盾も持たない白系＝亡命ロシア人の文化をターゲットとしていく動きと深く関わるものではなかったか。そして、その1年後の上海バレエ・リュスのリッツ劇場での初めての上演も、それとほぼ等しい意味合いを持っていたと考えることができるのではないか。

むろん一方においては、「リトル東京」などとも呼ばれたように、内地のそれとさほど変わらない街並みが続く虹口地区で暮らす日本人にとって、これまで味わったことのない異国の芸術に触れることは、そうした環境の中で温存される文化の偏狭な捉え方を問う契機にもなり得るだろうし、実際そのようにして事態が進むことを望む動きが生じなかったわけでもない。同時代に発表された池田みち子<sup>(8)</sup>の短編小説「上海二世」（『三田文学』1941・11）は、この街と東京との間を行き来し、上海で暮らす時は好んで「ユダヤ人街や支那人街を転々としてすごす日本人の女性である「私」と、この街で生い立ち、一時日本で仕事に就いたもののすぐに戻ってきていまは「虹口サイド呉淞路の呉服屋の横丁」で年老いた母と暮らしている村山という青年との交渉を描いたものだが、その中で「私」は、「大陸興行に内地から渡ってくるレコード会社の流行歌手や映画俳優の実演しかみたことのない村山のために、「ライシャムシャーターの日曜日の切符を買ふ約束」をするのである。

しかし、多田裕計<sup>(9)</sup>の小説『新世界』（大都書房 1943年7月）では、それとは随分異なった、ライシャムでのロシアン・バレエ上演に対する登場人物の感懐が表出してくる。1940年から41年にかけての上海における著者の行

動を投影するかたちで造型されている梶原三郎<sup>(10)</sup>が、妻の清江、勤め先の「中日文化会社」の副社長島田と連立って戦争の勃発を何日か後にひかえた「昭和 16 年初冬」のライシャムシアターに出かけるくだりがある。自動車から降りた彼らの目に劇場の「北欧風な鶯色」の外観が映じてきたり、ホールから会場に向う階段の昇り口には「ビナス女神」の「一丈に余る彫像」が「無心な微笑を含ん」でいるというように、当時の劇場のたたずまいを彷彿とさせる描写もあれば、その日彼らが観る「レイモンダ姫」の役に扮したプリマバレリーナとして、実際に上海バレエ・リュスに所属していた H・ボビニナという実名が出てきたりもして興味深い。だが、ここではそれとともに、燦然と輝く王姫冠と青い絹の衣装を身に着け、緑と真紅の照明に映えて恋人を待つ間の不安と喜びを艶麗に表す彼女の舞踏を見ている三郎の心に、「何故か其れが寂しい一匹の孤独な季節を忘れた白鳥の舞ひのやうに思はれてしょうがなかつた」という感懐が生じてきたこと、そしてまた、同じ場内にあつてボビニナの扮するレイモンダの踊りをうっとり見つめているその大半は白系ロシア人である観衆の表情を、「日々<sup>(ママ)</sup>に圧迫されてゆく上海での火熱地獄のやうな生活の苦しみから、今宵だけは逃れて昔の追憶と夢に耽つてゐる「上品でうら哀しい」ものとして三郎が見ていることに注目したい。

ロシアン・バレエは白系ロシア人の心の中に過去の華やかな幻影を蘇らせることはあつても、そこには「現在も、まして未来も交つて」はこないと三郎は見る。こうした「今日から立ち截られてゐる芸術は、それがいかに長い伝統を負つていても、滅びゆく運命にある芸術だと言わざるを得ないし、それに縋る民族もまた明日への活力からは遠く隔てられた存在であろうと思惟する三郎が次に抱いたのが、日本の「能楽」や「歌舞伎」が、日本の「大東亜共栄圏」樹立の動きを寿ぐ伝統芸術になっていくことへの希望であり確信であつた。

こうした文化上の優越者意識、それは再び「大陸新報」に戻つて例の「お蝶夫人」上演に関する記事を見れば、舞台上のヒロインが表す「純情と信念」を「大和撫子」の典型として喧伝すべきという言辭を通してうかがうことができる<sup>(11)</sup>し、「上海に於けるロシアン・バレエ 現地文化を語る座談会」の場合で

も、同じ心性が庇護や指導といったポーズのもとに現われていることがわかる。その一節を次に引いておく。

バレエといふものは長い伝統を持つた西洋の芸術の中でも立派なもの、一つですから、かういふものを上海のやうな騒然たる土地で、団員一同食ふために内戦をやつてゐるやうな状態にありながら敢然と故国の芸術を守つて飽く迄もやつて行くといふその意気にも感じて、極東の盟主たるべき日本人は今後ずつこの連中を見守つて行く上において、その内容その他について日本人側の立場から種々の要求もドンドン持出し又時代性といふことにも反省を促すと共に、一方劇場芸術については日本人は非常に進歩してゐると思ひますから、さういふ方面からも出来るだけ応援もし指導も与へるといふことは決して無意義なことでないと思ひます。(12)

さらに、このようにみずからを指導者の立場に擬する者は、庇護の対象として劣位の立場に置かれた者がそれにふさわしくない行動をとりはしないかと警戒し、もしそうした傾向が見られた時にはそれを排除していくことを正当化する動きもとっていく。当初、1941年5月10日に予定されていた上海バレエ・リュスのリッツ劇場での公演が一時中止に至ったのには、じつはそういう問題——舞踊団内部の「不良分子」の介在——が絡んでいたのである。5月20日の「大陸新報」は、その人物として「同劇団を主宰する「佛系露人サビツキー」の名を挙げ、彼が「租界といふ特異性を巧みに利用して猶太人的な行動をなし」ていることが上演中止の原因になったと報じている。結果的に公演は5月21日に実現するのだが、そこに至る経緯についても、「サビツキーの下に働くを■よし」としない大部分の団員達が別個の動きをとったからと報じている。だが、これをはたして額面通りに受けとめてよいものか。サビツキー以外のほとんどの団員を「親日分子」としていることなど眉唾物に近いし、本来の活動拠点を離れてたった1日だけの日本人居留区での公演を成功させるために組織を二分するような動きがバレエ団内部で生じるとは思えないし、管見のかぎりではそうした分裂騒ぎがあったことを伝える資料はこの邦字新聞以外には見つからない。

そして、事の真否を問うこと以上に、みずからの支配的地位を誇示しその保全を図るために、それを揺らがす不穏分子のイメージを作り上げて監視の目を光らせていくという動きは、ことライシャムシアターに関して見ていくと、またひょんなところから噴き出していく。たとえば、それは反ユダヤ的思想を喧伝する立場から発せられた、ライシャムシアターに巢食うユダヤ的イメージの告発というかたちをとって現れていった。サビツキーを指弾の対象とする「大陸新報」の記事にもそうした要素は指摘できるが、それをより露骨なかたちで押し出したものが、その当時日本国内で発行されていた国際政経学会の機関誌「猶太研究」の1941年8月号のコラム欄「世界裏ニュース（極東）」における、上海の「ナシ・プチ」誌の記事の紹介の仕方であった。つまり、その具体的な内容はといえば、先のサビツキーやその妻ドーラヤーコウエル以外にも、「『リヤイシム』(＝ライシャム 引用者注)芝居の特許人」ローゼンヤ、「リヤイシウマ及びプリプトコフ劇場をかけ持つてゐる」劇場付の医者」シピールベルグといったユダヤ人の名が挙げられ、上海における純正なロシア芸術が彼らの統制下に置かれ汚染されていくことへの危惧が表明されるものなのであった。

## 2 「イヴニング・ポスト」が伝える“XCDN Calling”の盛況

1939年1月創刊の「大陸新報」の発行元である大陸新報社は、その翌年から『大陸年鑑』の刊行も開始しているが、この年次報告書の昭和17年版(1941・11・20発行)には、当時上海で発行されていた主要な新聞を概観する項が立てられていて、その中でこれから取り上げていく「ザ・シャンハイ・イヴニング・ポスト」(以下「イヴニング・ポスト」と表記)は、「米国籍、重慶御用紙、徹底的に反日的、発行部数多からず」というように目されている。「国益」重視の立場にある書き手の対象に向けての敵愾心が明瞭に示された表現だといえるが、ここで1941年5月の時期に区切って見ても、たとえば日本の歩哨を狙撃した犯人探索のために日本海軍陸戦隊が蘇州河でとった行動をめぐる

て対立する「イヴニング・ポスト」と「大陸新報」の報道言説は、なるほど当時の上海がそれぞれの国の国策や国益を負った活字メディアの報道宣伝戦のメッカであったことを肯わせるものである<sup>(13)</sup>。

ライシャムシアターをめぐる「イヴニング・ポスト」の記事を見ていこうとすると、こうした抗争的關係が「大陸新報」との間で生産され続けていたことを予備知識として持つことは必要だろう。だが、そのことに制約されすぎてしまい、予断をもって報道記事に接してしまうようなことは避けねばなるまい。あくまでもそこに示されている事実やデータに基づいて、「イヴニング・ポスト」が伝えてくる、同時期の「大陸新報」には掲載されていないライシャムシアターのエンターテインメント性を掘り起こしていきたい。

5月1日の「大陸新報」に上海バレエ・リュスのライシャムシアターにおける「海賊」上演を伝える記事が載ったことはすでに記したが、同日の「イヴニング・ポスト」の方にも、“colourful and amusing ballet”という言葉を盛り込んだ、このバレエに関する広告が載っている。ついでに言うと、そのすぐ下にも5月4日の午後5時15分（「海賊」のマチネ終了後であろう）から同じ劇場で催される工部局交響楽団の室内楽演奏会の広告があって、こちらの方も5月2日付「大陸新報」夕刊に載った「工部局室内楽演奏会」の記事と対応している。

けれどもこれから紹介する一連の記事は、「イヴニング・ポスト」の方だけにしか載らなかった、ライシャムにおけるある催しに関するものである。その第一弾は、奇しくも先に少しだけ言及した蘇州河での日本海軍陸戦隊の行動を批判的に取り上げた記事をトップに持ってきた、1941年5月10日付発行の同紙広告によって放たれた。それはこの日の第4面の下半分ほとんどのスペースをとって掲載された、ライシャムシアターで13日の火曜日から17日の土曜日まで毎晩9時15分の開演を予定している<sup>(14)</sup> “XCDN Calling”に関する広告【図2】である。いったいこれはどんな催しなのか。同日第15面の「“XCDN Calling” Set For May 13」、13日の「“XCDN Calling” Show Boasts Hit Numbers」、14日の「“XCDN Calling” Scores Success」【図3】、20日

の「XMHC Broadcasting XCDN Calling From Lyceum At 9.15 p.m.」、さらには番外編として、これも当時の英字新聞「ザ・ノースチャイナ・ヘラルド (THE NORTH-CHINA HERALD)」の5月21日の紙面に載った写真入り記事「Mexican Highlight in “XCDN Calling”」【図4】及び「THE STAGE “XCDN Calling”」など、5月中に数多く現れた関連記事も参照しながらその点をおさえていこう。

まずは“XCDN Calling”という呼称について。「XCDN からの呼びかけ」と受けとめたらよいだろうか。この時期の上海ラジオ界は、新聞界と同様に「放送局の数から言つて驚異的であるのみならず、放送内容に於いても想像を絶する複雑性をも」つ<sup>(15)</sup>傾向にあったが、「XCDN」は南京路が外灘に突きあたる地点に建つキャセイ・ホテル（華懋飯店）内で活動していたイギリス籍の放送局の呼号だと思われる。電台名は「民主」<sup>(16)</sup>。

そして、このイギリス籍の放送局の名を冠した催し物で入ってくる収益のすべてが、第二次大戦の渦中であってドイツ空軍の爆撃によって甚大な被害を受けていた本国イギリスの戦争基金（空襲救済基金）として送られるという宣伝がなされていたことも注目に値しよう。すなわち10日の広告には、「\$10-\$2」と入場料を記した横に“ALL PROFITS TO CENTRAL BRITISH WAR FUND (AIR RAID RELIEF FUND)”という表記が見られるのである【図2】。ついでに言うと、こうした義捐金募集の性格を伴ってやはりこの月のライシャムシアターで行われた、規模としてはおそらくささやかな催しものとして「イヴニング・ポスト」の広告からこれまた拾えたものに、30日夜のMARINA BURLAMAQUI MEEのピアノ・リサイタルがある。ブラジル総領事がスポンサーを務めるこの慈善演奏会が支援の対象としたのは、中国人避難民を収容するアメリカン・ホスピタルであったが、そのような災厄を彼らの上に招いた側が発行する「大陸新報」紙上にこの演奏会のことを伝える記事や広告が載らなかったのは、ある意味当然なことであった。

“XCDN Calling”の内容に目を転じよう。XMHC局のエースのラルフ・リン(Ralph Lynn)とオリバー・ラングレー(Oliver Langley)の共同制作、

演出になるこの催しは、歌あり、ダンスあり、コメディあり、マジックありといった、エンターテインメント性を前面に押し出したレビュー形式のものである。実はこれに先立って3月初めに第1回目の“XCDN Calling”が開催されていたのだが、その折りと比べて今回の方が格段に演出効果が上っていると賞賛の声が多く寄せられ、そのこともあってか、公演は17日に一旦は終了したものの、19日と20日に再度上演、ラングレーによる実況解説も交えてXMHC 700 キロサイクルが会場のライシャムから直接中継する運びとなった。

記事を読み進めていくと数々のハイライトシーンのあったことがわかるが、それらの中で印象深く思われたものをいくつか取り上げてみるなら、たとえばラルフ・リンの卓越した演技指導によって素人芸について観衆が抱いていた先入観を見事にひっくり返してしまった、“Lovely Lady”と呼ばれるアマチュアのコーラスガールたちの存在が挙げられる。プログラム中の“Mexiconga part”に登場したこの美女の一群【図4】は、美しく華やかなコスチュームを身につけ、軽やかで活発なステップを踏んでショーのヒットナンバーの一つになったという。そして、このコーラスグループを背景にしてジル・レイス(Jill Leith)嬢の歌った曲が“Down Argentina Way (遙かなるアルゼンチン)”。1940年に20世紀FOX社が制作した同題の映画の中で、主演女優のベティ・グレイブルが歌ったものだ。このテクニカラー方式のミュージカル映画では、彼女のほかにもカルメン・ミランダが熱い歌声を鳴り響かせずれば、ニコラス兄弟がスペシャルダンサーとして登場、心浮き浮きするタップダンスを披露する。そして、映画の中のそのような場面の連続が与えてくる感動を、ライシャムシアターに集った観衆たちはおそらく擬似体験している。上海から選ばれたカラフルなコーラスガールの華麗なステップと場内に響き渡るルンバのリズムに沸き立ちながら、彼らはハリウッドやラテンの情熱に感染していく。

上海という地に居ながらにして異文化との接触空間を生み出していこうとする演出は、「遙かなるアルゼンチン」を歌い踊るシーンに限られるものではなかった。プログラムの中で“The Progress Of The Dance”と呼ばれるパート

に移ると、舞台にはオードレイ・ブリストア（Audrey Brister）、シャーレイ・コンドン（Shirley Condon）ら舞踏の名手が登場、メヌエット、ガボット、ワルツ、ポルカ、タンゴ、コンガを次々と踊ってみせた。さまざまな民族舞踊のリズムに接して観衆の心は浮き立ち、2人の「Gメン」こと Gino と Geza、そしてまたビル・ヘガミン（Bill Hegamin）のジャズやジルバのピアノ演奏が、それに拍車をかけていく。国柄や民族を異にする音楽や舞踊が一つ所で落ちあい、一緒くたになって観衆の心を捕えていくのである。

そうした劇場空間にあっては、ポルトガルの可憐な歌姫ラ・ベル（La Belle）も格別の印象を観衆の心に与え、留学先のアメリカから帰国したばかりの中国人学生の物真似をする役者のハリー・クレイン（Harry Klein）もやんやの喝采を浴びた。が、その中でもとりわけ脚光を浴びたのが、中国人手品師 Long Tak Sam とその一座である。20年に及ぶ芸歴と世界的名声とをひっさげて、久しぶりにライシャムシアターでの“XCDN Calling”に登場したこのマジシャンは、満々と満たした水の中を金魚が泳ぐ大きな鉢や、お茶の入ったグラスがいくつも並んでいる盆を中国服を着た自分の身体のどこかから取り出したり、その場で細かく切り裂いたノース・チャイナ・デイリーの新聞紙を一瞬のうちに元の大きさに戻してみせたりしてアツと言わせた。

ただここで留意したいのは、そうした出し物のいくつか——たとえば朱色の金魚を取り出すマジック——がたしかに中国風の演出効果を挙げているにせよ、それらを演じてみせる Long Tak Sam のキャラクターが中国人のイメージとは相当異なる雰囲気を漂わせていたということだ。

オーストラリア人の父と香港出身の中国人の母の間に1962年に沖縄で生まれた、Long Tak Sam の曾孫アン・マリー・フレミング（Ann Marie Fleming）がまとめた『The Magical Life of Long Tak Sam』（Penguin Group, 2007）を参照しながら書き進めていくと、1885年に中国北部の農村で生まれた彼は、地方巡業を行う芸人一座に身を投じて少年期を過ごした後、20歳の折りに故国を去り、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、中国（上海）、ハワイ、ドイツ、カナダといった地域を一座を率いて興行しな

がら、1940年に上海に戻ってきている。その間、旅のはじめのヨーロッパ巡業時代にはオーストリアで出会った Poldi と結婚、妻子をヨーロッパに残して渡ったアメリカでは一座の名称をそれまでの“TAN KAI (丹桂)”から自身の名前の「郎徳山」に基づく“Long Tak Sam and Troupe”に改称、ハリウッドを中心とする映画産業の躍進を前にして新たなボードビル形態を追求、バンクーバーでは“Shanghai”と名づけたレビューの上演を手がけるなどといった経験を積んだ。そしてこのようなトランスコンティネンタルな旅 (trans-continental tours) の経験によって培われた“Long Tak Sam”像はといえば、英語、フランス語、ドイツ語、さらにはイデッシュ語すら話せる multi-linguist である芸人、西洋人を前にしては棒、皿、針、刀剣、金魚に加えてその初期の頃は辮髪をも含む中国風の小道具を用いてアクロバティックな演技を披露してみせれば、中国をはじめとするアジアの各地を巡業する際には“The Doll Dance”と名づけた西洋風マジックを紹介していく、コスモポリタ的な芸人と呼ぶにふさわしいものであった。Sam のこうした異種混合的な魅力は、幼い頃からバレエの素養を積み、やがてヴァイオリンを用いたアクロバティックな演技と“half chinese and half western”的な容貌によって父の一座を盛り上げていった Mina と Nee-Sa の姉妹にも受け継がれていくことになる。また、1933年のベルリンのスカラ座でのこの一座の興行が上手く立ち行かなくなった背景に、当時勃興しつつあったナチの純血主義があったことを考えあわせれば、この出来事も Sam 一座が放っていた雑種の魅力を逆説的に物語るものであったと言える。

そんな“Long Tak Sam and Troupe”がいままたライシャムシアターに姿を現した。その中にいた中国風のコスチュームを身にまとう2人のクレバーな中国人の娘<sup>(17)</sup>によっても人気をさらった一座の演技は、中国趣味を伝える側面もあったかもしれないが、むしろそれ以上に他のプログラムと絶妙なバランスをとりながら、文化のメルティング・ポット (melting pot) がいままさにライシャムの劇場空間に現出していることを強調する機能を果していたように思う。

このような文化のメルティング・ポット現象に関連して、舞台はライシャムシアターではないが、ちょうど同じ時期の「イヴニング・ポスト」では彼女の活躍が頻繁に取り上げられ、他方邦字新聞「大陸新報」の方では一顧だにされることのなかった、“マヌエラ”と呼ばれた“日本人”の女性ダンサーについても付言しておこう。この踊子が太平洋戦争開戦前夜の上海租界で、白系ロシア人の恋人、アメリカ人の芸能新聞編集長、パリから流れてきたユダヤ人の振付師らとの交友を通していかに軽々と国威というものを無化していったかについては、後にマヌエラ本人が本名の「和田妙子」で出版した『上海ラプソディー 伝説の舞姫マヌエラ自伝』（ワック株式会社 2001年6月）でも詳しく語られているが、1941年5月の「イヴニング・ポスト」紙はその模様をリアル・タイムで伝えてくれる。すなわち、越界築路（エクスターナル・ロード）の延伸によって租界エリアの拡充が急速に進んだ滬西地区にあって、当時一流を誇っていたアリゾナやファーレンスというナイトクラブに彼女が出演することを報じる記事<sup>(18)</sup>は、そのことごとくが“マヌエラ”が得意とするジャンルがハワイアンからスパニッシュ、さらには“**Persian Market**”という曲名に象徴されるオリエンタルなものに至るまで多彩であること、かつまたそのような才能の持主の出身が「ホノルル」であり、当地に来るまでインドやジャワでも成功を収めていることを強調しているのである<sup>(19)</sup>。

### 3 「ル・ジュルナル・ド・シャンハイ」に 掲載されたライシャムのオペレッタ関連記事

後に自らの上海時代を素材とした長編小説『祖国喪失』（文芸春秋社 1952年5月）や評論集『上海にて』（筑摩書房 1959年7月）を上梓していく堀田善衛が、慶応義塾大学を繰上げ卒業して国際文化振興会に就職したのは1942年の10月だったが、同会の調査部に通いはじめた彼に与えられた仕事の一つが、「ジュルナル・ド・シャンハイ」を読むことであった<sup>(20)</sup>。当時上海で発行されていたこのフランス語の新聞は、本国におけるヴィシー政権の樹

立(1940年6月)、汪兆銘政権によるフランス租界の第二特別法院の接收(1940年11月)といった政局の変化を受けて「イヴニング・ポスト」紙とはまた異なる編集方針をとっていたと言えるが<sup>(21)</sup>、そのような新聞の1941年5月——時期的にみれば堀田青年が目を通したものより1年半ほど遡る——の紙面に掲載されたライシャム関連記事の特徴を、最後に検討していくこととする。

いま手元にある原紙が全揃いではないので断言することまではできないが、1941年5月の「ジュルナル・ド・シャンハイ」紙には、「イヴニング・ポスト」の紙面を賑わせた“XCDN Calling”関連の記事、及び「大陸新報」が鳴り物入りで喧伝した上海バレエ・リュスの虹口公演に関する記事が見当たらない。そのような刺激的なトピックは出てこないのだ。

しかし、収益金はすべて「空襲救済基金」に充てるとか、白系ロシア人の文化を日本人が率先して庇護するとかいうような国益や国策を反映した大きな話題が拾えなくても、「ル・ジュルナル・ド・シャンハイ」の場合は、そこに週1回のペースで掲載される「上海における音楽 (La Musique à Shanghai)」欄や、こちらの方は毎日出てくる「今日の興行 (LES SPECTACLES D'AUJOURD'HUI)」欄を丁寧に見ていくことによって、また新たなライシャムをめぐる物語が生れてくるのである。

まず「上海における音楽」欄だが、5月4日にフランス人の評論家グロスボア (Ch. Grosbois) が“Le Ballet russe”と題した文章を寄せていることが注目される【図5】。上海バレエ・リュスがライシャムシアターで「海賊」を上演することについては他の2紙も報道はしていたが、グロスボアの文章はその鑑賞記である。正統なバレエというよりはパントマイムと呼ばれるべきであり、全体としては甘ったるい出来になっていると述べていて辛口の批評となっているが、バクスト考案になる古風な残酷さを醸し出している舞台装置、劇場内に流れるオリエンタルなリズム、白いサリーをまとい両踝には鈴のアンクレットをつけたコゼヴニコワ<sup>(22)</sup>が舞うインド風のダンス、青い蛍光色の光の海に浮かぶ魚雷船など、評論家が目や耳にとどめたものも随所に記されていて、その場の光景が彷彿としてくるのではないか。

「今日の興行」はタイトルから察せられるように、その日市内の映画館や劇場で上映（上演）される作品情報である。「イヴニング・ポスト」の“The AMUSEMENT WORLD”欄中にある「最新人気映画(Current Cinema Attractions)」も同様の役割をもつが、キャセイシアターをはじめとしてグランド、メトロポール、ナンキン、ロキシー、ゴールデンゲート、アップタウンは両紙共通して取り上げているものの、ライシャムシアターに関しては、「ル・ジュルナル・ド・シャンハイ」の「今日の興行」の方だけが載せている。その他、ラファイエット・シネマ（辣斐大戲院）、ドーマー・シアター（杜美大戲院）を扱うのも「ル・ジュルナル・ド・シャンハイ」だけである点にも注目したい。これら三戲院のいづれもが、ジョッフル路あるいはラファイエット路というフランス租界の目抜き通り沿いやその近くに建っているからである。そして、同じジョッフル路に面したキャセイシアター（国泰大戲院）だけが「イヴニング・ポスト」でも取り上げられる理由として、そこがワーナーや MGM などの封切館だった事実が挙げられるとするなら、ちょうどそれとは対照的に「ル・ジュルナル・ド・シャンハイ」の「今日の興行」が知らせるライシャムの演目には、そういう大手映画産業の路線には乗らない、もう少し個性的なものが並んでいかないだろうか。

そんな予想を裏切ることなく、同欄には次のようなライシャムにおける催しが掲げられた。

月/日	演目・上演団体・開演時刻
5/8	《Flower of Hawai》, par la troupe d'operette russe, à 20 h. 45
5/11	Concert symphonique par l'orchestre du Settlement, à 17 h. 15 《Ball in Savoy》 par la troupe d'operette russe, à 20 h. 45
5/24	Recital de danse Bateman-King, à 15 h. 《Manon》, par la troupe d'operette russe, à 20 h. 45 【図 6】

このうち 11 日夕方に開催された工部局交響楽団コンサートに関する記事は「大陸新報」、「イヴニング・ポスト」でも見られるが、それ以外の催しは初めて知るものばかりである。“Bateman-King”という団体については、「大陸

新報」紙上の座談会でそれが上海でロシア人が設立したバレエ学校であることは語られている<sup>(23)</sup>けれど、このバレエスクールの活動実態までは紹介されていない。それに対して、24日付「ル・ジュルナル・ド・シャンハイ」の別の面を見ると、その日の“Bateman-King”の演目が《Who Killed Cock Robin》というものであることまでわかる。

《Flower of Hawai (ハワイの花)》、《Ball in Savoy (サヴォワの舞踏会)》、《Manon (マノン)》の上演にあたった「la troupe d'operette russe (劇団オペレッタ・リュス)」という一団も気になる存在である。18日及び22日の新聞紙上にはこのオペラ団が登場する《Manon》に関する同じ内容の記事があるが、そこに掲載されたキャストイングの一覧を見るかぎり、上海バレエ・リュスとは異なるロシア人のメンバーによって構成されていた団体ではなかったかと推測される。ライシャムシアターには、こうしてまた一輪の花が加わるのである。

しかもオペレッタ・リュスが演じてみせたものの一つには、フランスの作曲家ジュール・マスネによる歌劇で、パリのオペラ・コミック座で初演された「マノン」があった。美しい娘マノンと騎士デ・グリュエの愛の行方をテーマとするフランスのロマンティック・オペラを代表する作品が選ばれて上演されることは、いかにもフランス租界に建つ瀟洒な劇場にふさわしいなりゆきであった。ジョッフル路（霞飛路）にあったフランスラジオ放送局（F. F. Z）は、22日の夜8時からの「クロード・リヴィエール夫人のお喋り：上海と中国の町の声」という番組の中で、ライシャムでのこのオペレッタ上演を取り上げている<sup>(24)</sup>。

しかしながら、ここで「マノン」以外の上演作品にも等しく注意を払うならば、オペレッタ・リュスの演技がライシャムを訪れた観衆の心にもたらすものが、純粋なフランス文化への憧憬だけに収斂するものではなかったことも想像できよう。「ハワイの花」と「サヴォワの舞踏会」、それぞれ1931年、32年にドイツで上演されたのをきっかけに世界的なヒット作となったものだが、それを制作した作曲家のパウル・アブラハムは、1892年にハンガリーに生まれ、

ブタペストのハンガリー王立音楽院に進んだ後、活動の地をベルリンに移してそこでこれらのオペレッタを成功させたものの、ナチスの政権掌握後はウィーンへの移住を強いられ、さらにそこからパリ、イギリス、キューバへ移動、最終的にはニューヨークに辿り着くが精神病を発症し、病状回復せぬまま 1960 年にハンブルクでその生を終えた、ディアスポラの芸術家なのである。そしてこのことは「ル・ジュールナル・ド・シャンハイ」が他の二紙に比べて、この時期欧州から上海に亡命してきたユダヤ人の芸術活動について多くの記事を載せているという、もう一つの興味深い事実私達の関心を向かわせていく。

たとえば 5 月 10 日の紙面には、当日の午後 9 時からアベニュー路 1623 で「EJAS (ヨーロッパユダヤ人芸術家協会)」が開催するオペラ風コンサートの紹介ポスターが記事本文に割り込む形をとってかなり大きく、それをプロデュースした評論家のアルフレッド・ドライフス (Alfred Dreyfuss) や、上海のユダヤ教会独唱者として著名だったバリトン歌手マックス・ウォーシャウアー (Max Warschauer) を含む 7 名の男女の顔写真入りで載っている。そして 18 日の「上海における音楽 (La Musique à Shanghai)」では、“Récital de chant de la société des artistes juifs (ユダヤ人芸術家協会の歌のリサイタル)” の見出しの下、その二週間前にバレエ・リュス評を載せたグロスボアが、ウォーシャウアーはじめソプラノを務めたロビチェック夫人 (Lisa Robitschek) やマーゴリンスキー夫人 (Irene Margolinski)、テノールのヴァーグマン (Hans Bergmann) らの歌唱力にも言及した長文の評論を書いているのだ。

この催しはライシャムで行われたものではなかった。だが、今回調査にあたった「ル・ジュールナル・ド・シャンハイ」は 1941 年 5 月の 1 ヶ月間のものにしかすぎず、その前後の時期にユダヤ人たちの音楽活動や演劇活動がライシャムシアターで行われていたなら、それに関する報道がこの新聞によってなされる公算はかなり高い<sup>(25)</sup>。と同時に、この「EJAS」に代表される亡命ユダヤ人の芸術活動の動向は、この時期すでに上海で発行されていたドイツ語新聞「上海ジューイッシュ・クロニクル」紙を用いて洗い出さねばならぬという課

題も生じてくる。すると今度は、また新たに亡命ユダヤ人コミュニティーが形成された上海の楊樹浦地区にある百老匯大戲院（ブロードウェイシアター）という劇場空間が浮上してくるだろう。1941年5月のライシャムシアターをとば口として、そこで繰り広げられた劇場芸術の多層性を明らかにしつつ、各新聞のそれに対する取扱い方の違いを通して上海租界文化をめぐる諸国の言説配置の構図も照射するという課題は、こうしてまだ端緒についたばかりである。

### 注

- (1) 「アジア遊学〈特集・上海モダン〉」62号（2004・4）。
- (2) 「滬上史談（14）」（「大陸新報」1942・10・21）。
- (3) 「大陸新報」夕刊（1941・5・1）。
- (4) 「上海に於けるルシアン・バレエ 現地文化を語る座談会（二）」（「大陸新報」1941・5・9）における川口記者の発言。川口は好評を博した演目として、「ザ・スリーピング・ビュウテイ」「プリンス・イゴール」「ザ・スワン・レーク」などを挙げている。
- (5) 「大陸新報」（1941・2・8）。
- (6) 「舞踊の春」は「大陸新報」1943・4・1, 3, 4。「美の饗宴」は1943・4・6夕刊。
- (7) 「河向ふ邦商繁昌記5 外人も舌巻く日本の芸術 南京路の上海画廊」（「大陸新報」1940・6・10）によると上海画廊の開設は4月18日。一方のフレンチ・クラブでの日本洋画展開催は5月2日。
- (8) 池田みち子は1940年から44年にかけての「三田文学」誌上に、この「上海二世」のほかにも、「上海」「上海にて」「上海の片隅」「加枝」「一ドルの話」「邦人商社」といった上海の生活を題材とした小説作品を発表している。
- (9) 多田裕計は第二次上海事変後の上海を舞台とする小説「長江デルタ」（「大陸往来」1941・3）で第13回芥川賞を受賞した作家であり、「大陸新報」にも小説「生命の鷲」を連載（1941・12・1～1942・1・31）した。
- (10) 『新世界』巻末の「著者略歴」は、多田の上海での身分を中華映画上海本杜社員、上海青壯年団組織委員として紹介しているが、これは共同租界の中心部に工部局の建物と向い合って建つハミルトンハウスの七階に本部を置く「中日文化会社」のニュース映画関係部門での仕事に就きながら、「上海日本青年隊」の結成とその活動の伸展に心血を注ぐ梶原三郎の立ち位置とほぼ重なる。
- (11) 「その純情な気持 巧みに表現できれば大成功 虹口で“お蝶夫人”上演」（「大陸新報」1940・2・18夕刊）。
- (12) 同座談会（完）（「大陸新報」1940・5・10）における川口記者の発言。

- (13) たとえば、“**Japanese Sink 100 Craft Here**”（「イヴニング・ポスト」1941・5・10）と「事実無根も甚だしい 皇軍誹謗のデマ宣伝 敵性外字紙に嚴重警告」（「大陸新報」1941・5・13）の報道言説内容の相違が目をはく。
- (14) 17日は午後3時よりマチネーもあり。
- (15) 『大陸年鑑 昭和十七年版』第五編 文化－第四章 新聞、雑誌、ラヂオ」参照。
- (16) 『大陸年鑑』では「民主」の呼号を「XCDN」ではなく「XGDN」と記しているが、もう一つのイギリス籍の放送局「XMHC」（大美晩報）が5月19・20日の2日間にわたって再演されるこの催しの模様を20日に実況中継することを伝える「イヴニング・ポスト」の記事「**XMHC Broadcasting XCDN Calling From Lyceum At 9.15 p.m.**」中に“**Democracy Calling**”という表記があることに拠れば、『大陸年鑑』のそれが「XCDN」の誤記であることがほぼ断定できよう。
- (17) 『**The Magical Life of Long Tak Sam**』中の叙述によると、MinaとNee-Saは1930年代には二人とも中国人の医師や実業家と結婚してショービジネスの一线を退いている。したがって1940年のライシャムに登場した2人の中国人の娘を彼女らだと断定するには、父を応援するためにこの催しの時だけカムバックしたと考えることも可能だが、慎重を期する必要がある。ただ、そのこととは別にアン・フレミングの叙述は、結婚前の祖母（＝Mina）が上海にダンス教習所を開設する一方、現地の新聞（China News）のコラム欄に身体の健康を通じての女性解放を支持する文章を寄せたこと、さらに日本軍の中国侵攻に際しては赤十字とも連携して活動したことなどを伝えていて、興味深い。
- (18) “**Manuela Dances At Arizona**”（1941・5・7），“**Manuela To Dance At Farrens**”（5・16），“**Manuela Scores At Farrens**”（5・17）。
- (19) 実際には1911年に朝鮮半島で日本人の両親のもとに生まれた妙子は、東京・大阪でフロア・ダンサーとして出発した後、大連にできた大連会館や上海虹口のブルー・バードを経て、上海租界で売り出していった（『上海ラプソディー 伝説の舞姫マヌエラ自伝』参照）。
- (20) 日本近代文学館資料叢書『文学者の手紙4 昭和の文学者たち 片岡鉄兵・深尾須磨子・伊藤整・野間宏』（博文館新社 2007年5月）所収の堀田の芥川比呂志宛書簡（1942・10・13消印）参照。
- (21) 前出の『大陸年鑑 昭和十七年版』では、「イヴニング・ポスト」をすでに見たように「徹底的に反日的」と紹介するかたわら、「ジュールナル・ド・シャンハイ」に関しては「中立的」という見方を示している。また、今回の調査で用いた同紙第一面の題字の箇所には“**LE JOURNAL DE SHANGHAI**”のフランス語表記と並んで「法文上海日報」という文字も印刷されていた。「上海日報」のフランス語版の意だが、どのような経緯があつてこうした表記も併用されたのか。

調査不足ゆえ後日の課題としたい。

- (22) ニーナ・コゼヴニコワもバレエ・リュスのプリマバレリーナの一人。ハルビン音楽バレエ学校を経て上海バレリ・リュスに入団。現在のハルビンにあるモデルンホテルの館内には、かつてこの場所にあったモデルン劇場の舞台にも上ったコゼヴニコワの踊る姿を撮した写真が飾られている。彼女は新中国誕生後オーストラリアに向った。
- (23) 注(4)と同じ。
- (24) 5月22日付「ル・ジュールナル・ド・シャンハイ」紙の“**La Station Radiophonique Française F. F. Z**”欄参照。
- (25) たとえば、黒田晴之「シャガールの描いた楽士はどんな音楽を演奏したか(3)あるいはロシア革命前後のユダヤ人が展開した音楽について」(松山大学「言語文化研究」2009・9)が「上海ジュエイッシュ・クロニクル」紙から発見した、ワルシャワ出身のラーヤ・ゾミナの1941年11月19日におけるライシャムでの特別公演に関する記事も、「ル・ジュールナル・ド・シャンハイ」に載っているかもしれない。

付記：本稿の作成にあたり、外国語文献の解読や内容確認に関しては、東美緒、網干毅、関根真保、新関芳生各氏からの助言を得た。記して謝意を表したい。

——文学部教授——



図1 上海バレエ・リュスのリッツ劇場での公演を伝える「大陸新報」広告 (1941・5・10 夕刊)

**RALPH LYNN and PRESENT**  
**"XCDN CALLING"**

**2nd Edition-Bigger-Better-Brighter**

with  
**LONG TAK SAM AND TROUPE**  
**BILL HEGAMIN AND HIS BAND**  
**THE GEMEN—THE "PEANUT VENDORS"**  
**THE JITTERBUGS — THE RADIO RASCALS**  
 and a cast of 70.

at 9.15 p.m.  
**TUESDAY** MAY 13  
**WEDNESDAY** MAY 14  
**THURSDAY** MAY 15  
**FRIDAY** MAY 16  
**SATURDAY** MAY 17

**LYCEUM THEATRE**

**ALL PROFITS TO CENTRAL BRITISH WAR FUND (AIR RAID RELIEF FUND)**  
 Prices: \$10 — \$2.

**THAN**  
 To those who are yet sceptical of the city's ability to produce an outstanding show without the direct assistance of professional talent, "XCDN Calling" will come as a pleasant surprise. Admirably directed, well executed and carried off with an air of finesse that would not shame a troupe of genuine artistes, this production is unreservedly recommended.  
 ... Shanghai Evening Post.  
 ... It is evident that here, at last is a variety program that picks you up and jets you down only after its finished. The producer's raison d'etre may be patriotic, this reviewer can recommend it as superlative entertainment.  
 ... China Press.  
 ... Suffice it to say that the show went off smoothly and was thoroughly enjoyed by the full house, not because it was a performance in aid of war funds, but mainly because it was a show well worth seeing.  
 ... Shanghai Times.  
 ... These four programmes which can be described accurately as one of the finest variety shows produced in this city during recent years. Seldom, if ever, has Shanghai's abundant crop of amateur talent been seen to better advantage than in this "Radio Parade".  
 N.C.D.N.

Matinee **SATURDAY** MAY 17 at 3.00 p.m. CHILDREN HALF-PRICE

図2 「イブニング・ポスト」に掲載された「XCDN CALLING」広告 (1941・5・10)

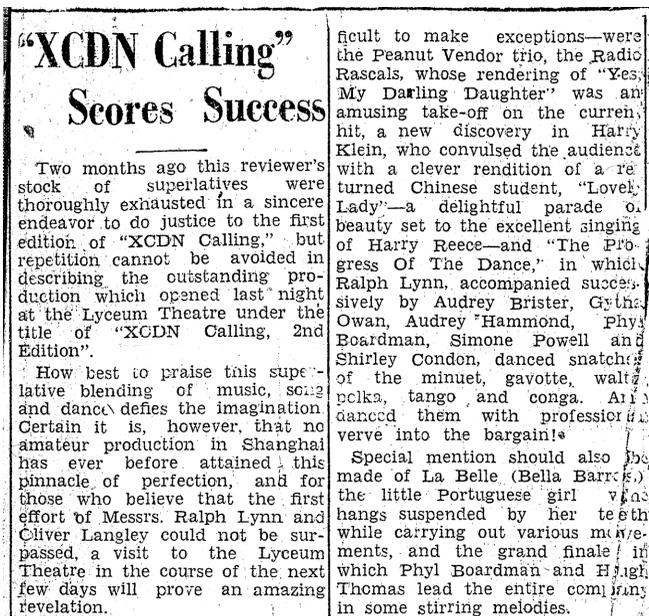


図3 “XCDN Calling” の盛況ぶりを伝える「イブニング・ポスト」の記事（一部）（1941・5・14）



図4 “XCDN Calling” の Mexican Highlight シーン。「ノース・チャイナ・ヘラルド」（1941・5・21）より。

# La Musique à Shanghai

## Le Ballet russe

Nous ne parlerons en effet que du Ballet russe, le concert de dimanche dernier n'ayant été qu'une répétition du Concert de Paques.

Disons-le franchement, «le Corsaire», en tant que ballet est un mauvais ballet, et M. Sokolsky, s'il a cru rester dans la tradition des ballets russes de la première époque, s'est lourdement trompé. Les décors de Bakst ou de Benois sont depuis longtemps déjà périmés et pourtant ils ne manquaient pas de mérites réels. S'ils sacrifiaient trop la ligne à l'orgie de couleurs et à un barolement étincelant ils avaient su retrouver une sorte de barbarie raffinée, une certaine violence archaïque et tout cela ne manquait pas d'allure ni même de beauté. Ils n'ont jamais sacrifié au «joli» ni au «charmants». Si on peut discuter leur pittoresque et leur couleur locale, en tous cas leur art restait robuste et franc.

laid et tout juste bon pour le cirque. De même quand Mesdames Elnik et Kojenikova, blondes comme les blés et chargées de chaînes dorées viennent danser, vêtues d'un sarri blanc et de bracelets de grelots aux chevilles, on comprend bien qu'elles ont pensé à quelque danse indienne, mais le rapport entre une danse indienne et leur danse reste fort lointain : nous sommes en pleine fantaisie de music-hall. De même les Corsaires, en étranges trousse-culottes et en cnémides de velours jonglant avec leurs fusils de bois ; de même la danse des rubans, si banale ; de même le bateau mystérieusement torpillé sur une mer de rayonne bleu-électrique : tout cela est trop joli et trop mièvre ; en définitive exécration.

Laissons la musique, mosaïque d'insignifances et de vulgarités doucereuses.

図5 「ル・ジュルナル・ド・シャンハイ」の「上海の音楽」欄にグロスボアが寄せた上海バレエ・リュスの「海賊」評（一部）。（1941・5・4）

LES SPECTACLES D'AUJOURD'HUI	
CATHAY :	«I Was An Adventuress», avec Zorina et Richard Greene
NANKING :	«A Girl, a Guy and a Gob» avec George Murphy et Lucille Ball
GRAND :	«Xmas in July» avec Dick Powell et Ellen Drew
METROPOL :	«The Sea Hawk» avec Errol Flynn et Brenda Marshall
ROXY :	«Go West» avec les frères Marx
CAPITOL :	«The Mark of Zorro» avec Tyrone Power
RIALTO :	«Northwest Mounted Police» avec Gary Cooper
GOLDEN GATE :	«Another Thin Man» avec William Powell et Myrna Loy
PARIS :	«High Sierra» avec Ida Lupino et Humphrey Bogart
DOUMER :	«Too Many Husbands» avec Jean Arthur et Fred McMurray
LAFAYETTE :	«The Graet Waltz» avec Ferdinand Gravet, Luise Rainer et Milliza Korjus
UPTOWN :	«The Beauty of Beauties», avec Claire Yuen (film chinois)
LYCEUM :	Récital de danse Bateman-King, à 15 h.
LYCEUM :	«Manon», par la troupe d'opérette russe, à 20 h. 45

図6 「ル・ジュルナル・ド・シャンハイ」(1941・5・24)の「今日の興行」欄。ライシャムでこの日 Bateman-King のリサイタルと《manon》の上演があることがわかる。